

第 64 回日本歯科理工学会学術講演会報告

平成 25 年度秋期日本歯科理工学会学術講演会が、広島大学大学院医歯薬保健学研究院生体材料学教授の加藤功一先生を大会長として 10 月 4 日、5 日の 2 日にわたり広島市アステールプラザで開催された。本大会における一般講演の演題数は、口頭発表 32 題、ポスター発表 97 題の計 129 題と多数の講演が行われ、企業展示も開催された。また、Dental Materials Adviser/ Senior Adviser を対象としたランチョンセミナーが 2 日目に開催され、「有機・無機材料の複合技術と歯科材料への応用」と題して活発な議論が交わされた。初日、2 日目には、「歯科理工学が他分野へ果たすべき役割」を大きなテーマとし、歯科理工学の将来を見据えた 2 題の特別講演もそれぞれ行われた。

今大会は、台風 18 号が九州地区に接近する状況下で開催されたが、大会初日は驚くほどの快晴で、夏日を思わせる天候に恵まれた。大会初日の口頭発表では、金属材料、インプラント、セメント関連をテーマとした 15 題の講演が行われた。ポスター発表では、4 題の研究奨励賞応募講演と、主に臨床応用、器械・技術、コンポジットレジン、レジン、接着をテーマとした 44 題の一般講演が行われた。ゆとりのあるポスター会場が準備されていたが、真剣な質疑応答に会場は溢れんばかりであり、近づく台風をその熱気で吹き飛ばす勢いであった。

今回の特別講演は、広島大学大学院医歯薬保健学研究院歯周病態学教授の栗原英見先生により、「Evidence-Based Dentistry の確立に向けて歯科理工学に期待すること」が講演された。口腔感染症の制御と予防について

バイオフィルムの抑制を具体例に挙げ、他分野で取り組んでいる様々な問題解決に歯科理工学的なアプローチが求められていることを述べられた。他分野における歯科理工学の意義を学会会員が改めて認識できる有意義な講演であった。

大会 2 日目は、初日の熱気のせい心配された台風 18 号も南に逸れ、時折小雨の降る天候となったが、初日同様に多数の学会会員で会場は賑わっていた。口頭発表では、レジン、生体用セラミックス、生体組織、試験法などに関する 17 題の講演が行われた。ポスター発表では、磨耗・溶出・消毒関連、生体組織、細胞、インプラント、歯科用合金、陶材、埋没材など多岐に渡る 49 題の講演が行われ、熱心な質疑応答が会場を埋め尽くしていた。

2 日目の特別講演では、独立行政法人医薬基盤研究所難病・疾患資源研究部ヒト幹細胞応用開発室研究リーダーの古江-楠田美保先生が「再生医療に果たす工学の役割—ヒト多能性幹細胞の培養において求められるマテリアル—」をテーマに講演された。話題の iPS 細胞の培養や使用される器具等についての解説もあり、有意義な講演であった。

本学術講演会は、加藤功一大会長をはじめ、平田伊佐雄準備委員長、多数の運営スタッフの皆様のご尽力により、恙無く進行し、盛況のうちに終了した。初日終了後に催された懇親会も当に盛大であり、かつ学生の奏でるクラシック音楽に耳を奪われつつ、美酒を堪能できた記憶に残る素晴らしい懇親会であった。本大会運営に多大なご助力を惜しみなく注いでくださったスタッフの皆様深く感謝し、第 64 回日本歯科理工学会学術講演会の報告とする次第である。

高田雄京

(東北大学大学院歯学研究科 歯科生体材料学分野)

